

私の友人が副校長をしている私立高校には、抜群に勉強ができて、東大や京大に現役でバンバン入るような、学年で一つだけの特進クラス・特別進学クラスがあります。その高校の看板クラス。

ですが、偏差値が飛び切り高い生徒たちだけで編成されているにも拘らず、1年生の4月・1学期が始まる時、全校で一番暗いクラスだそうです。どおーんと暗い。

なぜかという、そのクラスはみんな、第一志望を落ちた子たちだから。本当に行きたかったのは別の高校。でも、試験の点数が不足し門前払いをくらって、滑り止めで受けていたその高校の特進クラスに仕方なしに入った。つまり高校時代、「さあ、これから青春時代だ!」それを、挫折でスタートしたわけです。高校受験を一度失敗したことが尾を引いて、これからの人生、ずっと悪い事が続くという感じで皆暗い。落ち込んでうつむいて、悲観的な子たちが多い。

でも、クリスチャンの副校長先生は、そんな落ち込んでいる生徒たちを見れば見るほど、教師スピリッツが燃え上がる。「3年後リベンジや。泣いて入学したんなら、笑って卒業したらいいじゃないか。現役で東大・京大に行こう!」。行くだけだったら誰でも行ける。違う。「合格しようよ!」

教師というのは、生徒が元気なかったら元気を注入したい。何か、生徒の上に自分の人生を重ねているようなところがあります。僕も大阪教育大学という所を出まして、学校の先生になりたかったんです。しかしながら、教育委員会から「要らん」と言われて、ならなかったのですが、学校の先生って素晴らしい仕事だと思います。

ある意味、イエス・キリストは神から遣わされた教師です。「神とはどんな方なのか」という事を、人があれこれ想像して、頭巡らせて教えるというのではない。神であるイエスが人となって、「父なる神はこんな事を考えておられる」という事を伝えてくれた方。しかも、重荷に喘いで・罪に喘いで・死を恐れて・人生に悩んでいる人たちに向かって、福音というメッセージを携えてやって来た方。

私たちの罪の問題・死の問題を、完全解決するために来られた方がイエス・キリスト。今日は『**死の完全解決**』というテーマで、一緒に考えたいと思います。

聖書には「**罪の報酬は死です**」(ローマ 6:23)

罪を未解決のまま死んだら、人は地獄に行きます。このメッセージはとても厳粛です。

人生の中で高校受験に失敗した事は、大した事ではありません。何度でもやり直す事ができる。やり直せる世界が待っているんだったら、悲観する事はない。

でも、死後の世界にやり直しはないんです! 永遠の地獄に行って、後からやり直すと言っても遅いのです! なので、キリストは私たちが生きていた間に福音を届けようと、一生懸命に伝えて下さいました。

死の問題の完全解決。死の原因は罪ですが、そもそも、この罪というのが何かピンとこない。

聖書が言う罪とは「創造主を無視して生きる、独りよがりの人生」の事です。

今から7-8年くらい前に、ある集會に招かれて、今日のような福音メッセージをしました。その後、首にコルセットを巻いた一人の女性が面會に来ました。夏の暑さの中、首のコルセットは大変だなあと感じます。

彼女を連れて来たクリスチャンの女性が、「この人が話を聞いて欲しいのですが、今日は話を聞いてもらうだけでいいです。高原さんの説明を聞きたいんじゃないじゃなくて、聞いて欲しい事があるそうなので、よろしくお願いします。」

彼女は、一部上場の非常に大きな企業のOLです。本当にいい待遇を得ている人なのですが、一つだけ会社に不満がありました。それが、後で爆発するんですけど。

ある日、少しメイクが乱れたか何かで、化粧室に行って直していたら同僚が入って来た。この同僚が、彼女を連れて来たクリスチャン。それでこの同僚に、半年前に入ってきた新人の後輩の事で愚痴をこぼしました。この後輩は、何でこの大会社に入れたのかと思えるような人。

「新人なのに時間ギリギリに出社する。いっぱいミスして、色んな人に迷惑かけるのに、余り責任を感じていない。広い廊下のオフィスなのによく体がぶつかる。当たり屋みたい。余りごめんと言わないし、呑み込み悪いし、マナーがなってないし。何で、こんな大企業の会社に入れたんだろう。絶対、あの子、コネだよ！実力で入れるワケがない。それに、あの子って…」。

はじめ、ちょっと不満を漏らすつもりが、溜まってたもんだから爆発した。プワッと。このクリスチャンの女性も遮ったらしいのに、聞き上手なものだから「そう…そう…」って。

まくし立てて仕事に戻ろうとした時、ガチャッとトイレのドアが開いて、出て来たのがその後輩。目を真っ赤に泣きはらして「すみません！」と謝って、バーッと飛び出して行った。

イヤな事・直して欲しい事を面と向かって言ったらいいのに、その人がいない所で欠席裁判みたいに陰口悪口言って、もう、むちゃくちゃ後味が悪い。

「私もいけなかった…」と思って戻ったら、後輩は早退してもういません。翌日出社して、いの一番に謝ろうと思ったら休み。次の日、休み。次の日、休み。課長が「〇〇君は一身上の都合で辞めたから。」

「あの人に辞めてもらって良かったよ」と言う同僚もいたのですが、彼女が会社にいられなくなった直接の原因を作ったこの女性は「私は何て醜い事をしたのか…」。

そして、ひと月も経たない内に首が回らなくなったんです。コルセットをしているのは、どんな鍼治療もマッサージも外科もダメだから。ガッチガチに首が固まってしまっている。

私に「私は罪深い者です」と。私は「その告白は、言う人を間違っていると思います。私にではなくて、後輩に言うべきでしょう。」私に言っても、「子よ、しっかりしなさい。」(マタイ 9:2) って、そんな権限ありません。「あなたの言葉のせいでザックリいった人に謝りに行くのが、一番早いんじゃないですか？その前に、あなた自身が神に悔い改めるべきじゃないですか？」

メールなど全部遮断している後輩に「私が悪かった」と手紙を出したら、暫くして返事が来て、最後、和解しました。そうしたら、今まで「そんなの気にしなくていいよ」と他の人に言われていた時には首が全然動かなかったのに、気がついたら首が治っていた。人間って、何と靈的に造られている事が！

ところで皆さんに聞きたいんですが、今まで1回も悪口言った事がない人、手を挙げて下さい。

ここ、罪人だらけ。みんな、エライ(上下に)首振ってますね。実は罪って、楽しい面・美味しい面・甘い面があります。聖書には「はかない罪の楽しみ」(ヘブル 11:25) という言葉があって、罪には楽しみが伴うのです。

だから、彼女が悪口をバーッとやっている時、めちゃくちゃスッキリしている。スカッとして「何だ！あの子!!」と言っている。

だけど、自分の言葉の刈り取り、すなわち、言った言葉がもたらした究極の結末を見る・或いは向き合うようになった時「ああ、あれは悪い事だった!」と時間差で罪の自覚が出て来るんですよ。

多くの人が「そのくらいの事で罪って、私、生きてられないわ」と言うのは、罪の刈り取りをしていないからです。罪の刈り取りがないのはバレてないか、大目に見てもらっているだけ。隠されているだけ。でも、自分がやった事の結末・影響・その刈り取りと向き合っていく時、私たちの心は本能的に「悪は罰せられるべきだ」と思うのです。

悪口を言った彼女の良心が自分自身の首を固定してしまったように、悪を行いながら、のうのうと生きる事はできません。悪を悪と感じないのは、その結末の刈り取りと向き合っていないからです。罪がもたらす究極の結果が「死と死後の裁き」です。その解決について「キリストにはその力がある」という事が明らかにされているところを見ていきましょう。

ヨハネ 11:1-6 から 3 つのポイントで考えます。

1 さて、ある人が病気にかかっていた。ベタニアのラザロである。ベタニアはマリアとその姉妹マルタの村であった。

エルサレムの隣にベタニア村があります。今でもあります。私も何年か前に行ってきました。そこに仲良しの 3 人姉弟が住んでいました。順番は分からないんですが、多くの人たちが言っているのは、長女のお姉さんがマルタ、次女のお姉さんがマリア、末っ子の弟がヨシタカ、いやラザロ。集会に姉姉弟の人がいて。知り合いにこのパターンが多い。それはいいから。メモしないで。すごく仲がいい 3 人。

イエス・キリストは公生涯で 3 年半、イスラエル国中を回りますが、十字架が近づくにつれて、彼に反発する人たちがとても増えるんです。どんどんと緊張状態が高まっていく中で、気心が知れていて、最後までイエス・キリストご一行様のみんながゆったりとリラックスできる空間、それが彼らの家でした。エルサレムはすごい緊張状態なのですが、隣村のベタニアに行くと、マルタ・マリア・ラザロの 3 姉弟がもてなしてくれ、我が家に戻ったような、しかも 3 人共イエスを救い主として信じている人たち。その中の弟ラザロが非常に重い病気になりました。

3 姉妹たちは、イエスのところに使いを送って言った。「主よ、ご覧ください。あなたが愛しておられる者が病気です。」

この時、イエスはベタニアから遠い所にいたので、使いを送って来てもらおうとするのですが「主よ、今すぐ来て下さい!」とはひと言も書いていません。ただ、「主よ、ご覧ください。あなたが愛しておられる者が病気です。」

お姉さんたちはイエスがラザロをどんなに愛しているかを知っていたので、「彼が病気だと言えば、『すぐに来て!』と言わなくても、飛んで来てくれるに違いない」と確信しているんです。

この 3 姉弟に関する事を、イエスが後回しにする事は絶対がない。今どんなにやりかけの仕事があったとしても、それを置いてでも 1 番に駆けつけて下さるに違いない。ここにはイエスへの信頼・絆・私たちを何よりも愛して下さっているという深い確信があります。

だから「あなたが愛しておられる者が病気です。」この一文でいい。イエスがどれほど信じられ期待されているか、この呼びかけ言葉で分かります。

それが分かったので、**ヨハネ 11:4-6** これを聞いて、イエスは言われた。「この病気は死で終わるものではなく、神の栄光のためのものです。それによって神の子が栄光を受けることになります。」

イエスはマルタとその姉妹とラザロを愛しておられた。しかし、イエスはラザロが病んでいると聞いてからも、そのときいた場所に二日とどまられた。

愛しているのだったら、いの一番に行くはずでしょう。でもこれを見ると、愛していたので…すぐに行くのではなく、なお2日間、今いる場所に滞在して、わざと遅れて行った。

① 神とはどんな方か；神様は私たちを愛する方ですが、私たちの召使いじゃない。主権者です。

イエスはここではっきりと言いました。「**神の栄光**を現わすため、**人の子の栄光**を現わすために行動する。」**神の栄光**です。もちろん私たちを愛しています。が、人の言いなりになる神ではなく、神がご覧になって最善の事をなさるのです。神の視点で見る最善と人が考える最善は、必ずしも同じではありません。

神様はアラジンのランプの巨人ではない。アラジンのランプの巨人は何でもできる大男ですが、ランプをこすった人間のしもべです。だから人間が主人。ランプの巨人は人間ができない事をする能力を持っているけど、人間の言いなりにしかならない。アラジンのランプの巨人はしもべに過ぎない。それと同じように神を考えるのは、とんでもない考え違いです。

この世界は人間のために創られたものではありません。神のためです。人が神のために造られたのであって、神が人のために存在しているではありません。この宇宙も世界も自然界も、**神の栄光のため**に造られたのであって、人間が中心ではない。だから、神様の最善を信頼して、神の御心を受け入れていく事ができるなら、ほんとに調和した人生になるのです。

ニューヨークのリハビリセンターに有名な詩があります。

『大きな事を成し遂げようと思って力を求めたけど、謙虚さを学ぶように弱さを与えられた。

より偉大な事をするために健康を求めたけど、より良く生きるために病を賜った。

幸せになるために富を求めたけど、賢明に生きるために貧しさを与えられた。

世の人の称賛を得るために成功を求めたけど、鼻持ちならない人間にならないように、失敗をプレゼントされた。人生を楽しもうと多くのを求めたけど、人生を味わうように、シンプルなものだけが許された。求めたものは何一つ与えられなかったけど、願いは全てかなえられた。

私はあらゆる人の中で、最も豊かに祝福されていたのだ。』

人が思いつく最善と全知全能の神が考えられる最善は、常に同じという事ではありません。

「あなたが愛しているラザロが、今苦しんで瀕死の状態です。彼のためにすぐに来て下さい!」

これがお姉さんたちの考えでしたが、イエス様にはイエス様の考えがあったんですね。それで、なお**二日留まられた**のですが、すぐに行かなかったがためにラザロは死んでしまった。

他の事では「神様、あなたの御心の通りに」と祈れても、自分の家族や大事な人が病になると、何が何でも癒されて欲しいと思うんじゃないでしょうか？ 私もそれを経験しました。もう、声が枯れるほどに祈りましたよ。でも、神様には深いお考えがあるんです。

第1のポイントは、神は主権者であって召使いじゃない。この世界は、**神の栄光のため**に存在している。

② キリストは命を取り戻す力を持つ、人となられた神である；

ヨハネ 11:32 **マリアはイエスがおられるところに来た。そしてイエスを見ると、足もとにひれ伏して言った。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」**

これは言外にイエス様を非難しています。「あなたが来るのが遅かったので、手遅れで弟は死んでしまいました。あなたがあの時すぐに駆けつけてくれていたら、弟は死なずに済んだのに。」

実際、イエス・キリストの前で誰かが死んだという記事は、聖書のどこにも出てきません。どんなに医者に手遅れと言われても、イエス・キリストが癒せない病はなかったからです。

33-35 イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのをご覧になった。そして、霊に憤りを覚え、心を騒がせて、「彼をどこに置きましたか」と言われた。彼らはイエスに「主よ、来てご覧ください」と言った。イエスは涙を流された。

死別して残された者たちの涙や呻きを聞いた時、イエスは**霊に憤りを覚えました**。

死が人間に対して持っている力の強さ・死別というものが残された者の心に残す傷跡・死の圧倒的なパワー・死を目前にした時の人間の無力感・死が人間をどんなにひどく傷つけダメージを与えるか。

その現実を見た時、イエスは「それが人生なんだ。悟りなさい」と言ったのではない。

憤った！怒った！死に対して怒る方。

聖書を見ると、**死は神にとって最後の敵（Iコリント 15:26）**と書いてあります。神が死を造ったのではありません。いのちの創造主から、死は出て来ないのです。死はあくまでも罪の結果生じたもの。神が元々、人間の中にプログラムしたものではない。

死に対して、キリストは**憤りを覚える**だけでなく、**涙を流された**。この後、イエスがラザロを復活させるという記事が出て来るのですが、今から復活させるという事を知っていながら、泣く事ができるお方。

泣く者と共に泣きなさい（ローマ 12:5）という御言葉がありますが、イエス様は肉親がいなくなった者の痛みがよく分かる方なのです。

クリスチャンは死んだら天国に行きますが、それでも泣きます。これは不信仰ではない。今会えないと、やっぱり寂しいものですよ。クリスチャンで、どんなにイエス・キリストを信じていても、鉄のドアに指を挟んだら痛いでしょ。信仰と、指を挟んで痛いのは関係ない。

運命共同体のように一体化している家族が死によって引き裂かれた時、心の傷口から見えない血がドクドク流れて来るというのは自然な事。不信仰じゃない！

「ああ、今ここにいてくれたら、どんなにいいだろう。」「こんな時、一緒に泣いてくれたら、どんなにいいだろう。」家族を亡くした皆さんには、その人がいなくなった寂しさがあるんじゃないでしょうか？

キリストは、その痛みを自分の事のように感じる事ができる方。あなた以上に、あなたの心の痛みに寄り添う事ができる方。というより、もっとどん底まで下って、あなたを下支えする事ができる方です。

しかし、この方は、ただ泣いているだけではありません。

ヨハネ 11:43-44 そう言ってから、イエスは大声で叫ばれた。「ラザロよ、出て来なさい。」

すると、死んでいた人が、手と足を長い布で巻かれたまま出て来た。彼の顔は布で包まれていた。

イエスは彼らに言われた。「ほどいてやって、帰らせなさい。」

何と、死んで4日も経って臭くなっているはずの人を、名前を呼んで「**出て来なさい!**」お墓から出した。

「ラザロよ、出て来なさい。」というのは、ラザロの死体に言ったものではありません。

ラザロの体は墓の中。彼の霊と魂は天国に行っています。だから、彼が墓から出て来るためには、天国に行った霊と魂を呼び下して、肉体と合体させる必要がある。そんな事ができるのは神だけです。

天にいる霊と魂に向かって「**ラザロよ、体に入って出て来なさい!**」と言って、彼が出て来た。

なぜ「**ラザロよ、出て来なさい**」と言ったのかについて、ある人は「ただ『出て来なさい』と言ったらみんなが出て来る。怖いやんか。」これは、怖いやんかの世界じゃない。

そして「ラザロは、手足を長い布でミイラみたいにグルグル巻きにされて窮屈そうなので、解いてやりなさいと言った」って。

死んで4日も経っている人を生き返らせたというのは、イエス・キリストが公生涯で行った奇跡の中で最大の奇跡です。これが本当ならば「イエスこそが、命を取り戻す力のある人となられた神」という事になる。問題は、これが本当に起こった事なのかという事。

私はクリスチャンですから、ここに書かれてある通りの事が起こったと信じていますが、クリスチャンでない人でも、「文字通りに起こった事だ」と信じられる根拠を一つ紹介します。

イエス・キリストの様々な奇跡・特に死者の復活に関しては『タルムード』という本にも出ています。タルムードはたくさんのユダヤ人によって書かれたのですが、基本的には、イエス・キリストを救い主として否定しているユダヤ人たちが書きました。

「キリストは救い主（メシア）ではない。神ではない」という立場の人たちが書いた本がタルムード。

その中に「イエス・キリストが人をよみがえらせた」という記事が出て来るのです。

イエス・キリストを信じている人は彼に好意的なので、有利になるように証言するかもしれません。でも、イエスを認めたくない立場の人ですら「彼が人をよみがえらせた」と書いているならば、その証言は信頼に値するんじゃないですか？ イエスを認めたくない立場の人たちでさえ、「イエスが人をよみがえらせた」という事を認めている。ならば、その証言は真実として採用できるのではないか？ できます。

なので、ラザロの死後4日目の復活は、文字通りあったと信じていい。死んで4日も経った人を生き返らせる事ができるのは人間ではありません。それで、タルムードには「悪魔の力でやった」と書いてある。そうではない。イエスのご人格・言葉・行動・彼が示した愛は真に究極の理想的なものばかりです。

ただし「ラザロよ、出て来なさい。」すると、死んでいた人が、手と足を長い布で巻かれたまま出て来た。つまり生き返ったという事ですが、厳密には、これは聖書が言う復活とは言えません。これは蘇生。なぜなら、ラザロはこの後の寿命を生きて、また死ぬからです。それは聖書が語っている復活ではない。聖書が言う復活は、死んだ人間が二度と死なない体で復活する事。それをもたらすために、キリストはこの世界に来ました。

この事件の結果、大変な事になります。

ヨハネ 11:47-48 祭司長たちとパリサイ人たちは最高法院を招集して言った。「われわれは何をしているのか。あの者が多くのしるしを行っているというのに。あの者をこのまま放っておけば、すべての人があの者を信じるようになる。そうすると、ローマ人がやって来て、われわれの土地も国民も取り上げてしまうだろう。」

「このまま放っておいたら、この奇跡を見た人たちが『イエスこそ救い主だ!』と言って、ローマに対して反乱を起こすかもしれない。そうなれば、ローマとの戦争になって、我々は無茶苦茶になってしまう。だから、イエスの活動を認めるのではなく、彼にいなくなってもらおう。」

この事件がきっかけで十字架が確定しました。イエスは、彼らが自分を十字架につけるという結末になる事を「**人の子の栄光**になるからだ」と言ったのです。キリストは十字架にかかる事を目的に、この世界に来て下さった方です。私たちは自分の罪のせいで死にます。私たちの魂が罪のない世界に永久に行くためには、自分自身の罪そのものが処分されなければなりません。

私たちの罪を永久処分するために、キリストが十字架にかかって死んで下さったのです。

イエスは十字架にかかった時に7つの言葉を語りますが、これは6番目の言葉です。

ヨハネ 19:30 イエスは酸いぶどう酒を受けると、「完了した」と言われた。そして、頭を垂れて霊をお渡しになった。

十字架の上で肉体も心も引き裂かれ、最後に「完了した。」これは「支払い終えた」という事。遂に完成した。支払い終えた。完了した。何が完了したのか？ 私たちの罪の償い。

日本には「忌み言葉」という、おめでたい席では使わないように注意する言葉があって、これを「言霊(ことだま)信仰」と言います。言葉の中には魂が宿っているから、自分が言った言葉の通りになってしまう。実現してしまう。

なので、結婚式では、切れる・割れる・潰れる・裂ける・燃える・破れる、そんな言葉はダメ。一般では。ここでする結婚式には関係ありません。「罪と死と裁きからの救いだ!」と結婚式でもやってます。でも、「おめでたい席では、破壊を連想する言葉は使わないように」というのが日本の文化。言霊信仰。

その割に、めでたい時・特に何かが完成した時、破壊行為をセレモニーとする習慣が3つある。

1) テープカット；新幹線が開通しました・〇〇トンネルが開通しました、という時にテープカット。おじさんたちが5-6人並んで、タイミングが絶対合わない。ポトッと落とす人やらいる。カットは切るという事。縁起悪いんじゃないですか？ けど「今まで行けなかった所に、遂に道が完成した!」という事を破壊行為で祝います。

2) 船の処女航海の進水式の時の儀式；シャンパンのボトルを船の舳先に当てて割る。割るんですよ。割れた。沈没…。ちゃうちゃう。これからいよいよ海に乗り出して行こうとする時に、形あるものを粉碎する事によって、おめでとう。

3) くす玉；商店街完成とか。ヒモを引いたら2つに割れて、中から風船やらゴミ…じゃない。色々出て来て。

3つ共、破壊行為で完成を祝います。これは普通、日本文化にはない事じゃないですか？

キリストの十字架とは、十字架の上で御子イエス・キリストが切られ・打ち砕かれ・粉碎され・破壊されたという事。そのように、私たちの身代わりで死んで下さった事によって、初めて、天に至る道が完成し完了した。自分の身を犠牲にして「さあ、どんな人でも、父なる神様のところに戻る道が出来たのですよ」という宣言ですね。その道を、是非歩んで頂きたいと思います。

イエスは死んで墓に葬られ、3日目に死を突き破って復活し、40日間弟子たちに姿を現わして、最後オリブ山という山の上から天に帰って行かれました。しかし、それっきりでなく、また来られます。

ヨハネ 11:25-26 これは、ラザロを生き返らせる前に、イエスがお姉さんに尋ねている言葉です。イエスは彼女に言われた。「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことはありません。あなたは、このことを信じますか。」

ここは、「キリストの十字架の死と復活」がもたらしたものについて証しされている箇所。

「わたしはよみがえりです。いのちです。」

キリストは2つの言葉で自身をたとえました。「よみがえり」と「いのち」。

これは誰に適應されるのでしょうか？

1) ヨハネ 11:25 「わたしを信じる者は死んでも生きるのです。」

これは、「死んだクリスチャンは、キリストが空中まで来た時によみがえる」という預言です。キリストは天に帰って、それきりずっと天に居続けているわけではありません。やがて、また来ます。

この、空中まで再び来る事に関して、3つの特徴があります。

①いつでも起こり得る。今日でも。②いつであるかを知っている人は誰もいない。③7年間の患難時代の前に確実に起こる。

いつでも起こり得るが、いつ起こるかは誰も知らない。しかし、はっきりしている事が1つある。それは、キリストは患難時代の前に、空中まで降りて来るという事。その時、キリストを信じたクリスチャンで、既に死んでしまった人たちはよみがえります。「わたしを信じる者は死んでも生きるのです。」は、その意味です。既に死んだクリスチャンたちは皆、キリストが来た時、よみがえった体を持って天に引き上げられる。

2) ヨハネ 11:26 「また、生きていてわたしを信じる者は」

これは、キリストが空中まで来た時、「生きているクリスチャンは、決して死ぬことがない」という事。死を経験しないで、栄光の体に変えられて空中に引き上げられ、そこで一旦全員集合した後で天に帰る。私たちは死を経験しないで、いきなり天国に行きます。これが携挙。それを約束している言葉です。いずれにしても、神が準備した栄光の天国に行く事ができるのです。

2人のクリスチャンの死生観を紹介します。

まず、ジョージ・ケネディさん。「私が死んだら棺に入れられ、教会の前の墓地に埋められる事だろう。皆お悔やみの言葉を言い、悲しいメロディーの讃美歌を歌おうとするかもしれない。しかし、私は前もってあなた方に言うておく。私の葬儀の時は、ハレルヤコーラスにしてもらいたい。なぜなら、私はそこにいないからだ。どうして地面の体に目をやるのか？ 私はそこにいない。天国にいて、可哀想な皆さんを上から眺めている。皆さんは、死が支配する世界に、これからも生き続けなければならない。私がある世界に、今すぐ来る事はできないのだから。私は誰も経験した事のないような、健康と活力と喜びに溢れて天国にいるのだ。なぜ、悲しむのか。」

次に、ジョン・ゴードン・ギルティさん。ものすごく有名なクリスチャンだそうです。彼は不治の病を宣告されました。「町の中心から8km離れた自宅まで、私は歩いて帰る事にした。愛した山や川を眺め、しばらく腰かけて大空を見ていると、夕闇が迫り、やがて星が瞬き出した。そこで、これら自然界に語りかけてみた。『川よ、おまえが干上がって、川でなくなったとしても、私は生き続けている。山よ、おまえが山崩れで、平原に埋もれてしまったとしても、私は生き続けている。星々よ、もし爆発したり、ブラックホールに呑み込まれたとしても、私は生き続けているのだ。』」

話しているだけで、私も元気が出て来ます。これがクリスチャンの死生観。いなくなるんじゃない。栄光の天に凱旋する事ができるのです。どうして、そう言えるのですか？ キリストが栄光の天におられるからです。

最後に一つお話しして終わります。ヒッチコック (1899-1980)。映画監督。サスペンス映画の巨匠。めちゃ怖い。夜、見ない方がいい。サスペンス映画の手本とされ、「この映画の原点は彼の映画だ」と、テキストになるような名作を次々に撮った方。だけど、アカデミー賞を取った事がなかった。

